いじめ
（氏名・学校名非公表）

「何のためにそんなことをするの？」「なぜ？」僕は小学校一年から四年まで同級生のＡくんからいじめられていました。当時、僕は、なぜいじめられているのかわかりませんでした。

どんないじめだったかというと、たとえば、イスを投げつけられそうになりました。また、暴力も毎日振るわれました。嫌な言葉を毎日言われました。僕は、とても苦しかったです。僕は毎日毎日泣いていました。

小学校四年の八月ごろ、僕の机に一枚の紙が置いてありました。そこには、「死ね、死ね。」と書いてありました。その紙を僕が見つけたのを見て、Ａくんは僕のことを笑っていたのを今でも思い出します。

その時僕は何とも思いませんでした。なぜなら、そういうことを毎日毎日されていたからです。僕は「またかよ。」としか思いませんでした。

けれども、僕はその紙を家に持って帰って、親に見せることにしました。それは、友達が、「Ａくんが書いてたよ。誰かに言ったほうがいいよ。」と言ってくれたからです。親は「絶対に先生に見せんさい。」と強く言ってくれました。僕は、勇気をもらった気がしました。

次の日、僕は先生にその紙を見せました。そして、朝礼の時、先生がその紙の話をみんなの前で話されました。当たり前ですが、Ａくんは簡単に自分がやったとは言いません。けれども、友達が、Ａくんがその紙を置くところを見ていたと先生に話してくれました。友達のおかげで、書いた人がすぐにわかりました。

先生に呼ばれて、Ａくんは泣いていました。その日Ａくんは、別室で過ごし、授業を丸々一日受けられませんでした。僕はＡくんのことをとても恨んでいましたが、その日だけは、少しかわいそうにも思えました。

僕が自分のいじめのことを勇気を出して先生や親に言うことができたのは、僕の味方になってくれた友達がいたからです。その友達は、いつも「やめんさいや。」とＡくんに言ってくれました。また、先輩たちにもいっぱい助けられました。このことから、僕は「つらいときは、そのことをだれかに言っていいんだ。そして、困ったときは誰かに頼っていいんだ。」と思うようになりました。僕に対するＡくんのいじめはなくなりました。

それから二年がたち、僕は六年生になりました。そのころには、Ａくんとも普通に話せる仲になっていました。

そのうちＡくんが、ある下級生をからかうようになっていました。からかわれていた男の子には姉がいて、その人から、僕に「やめさせて。」と相談を受けました。

僕は正直いやでした。なぜなら、「何か言ったらまたＡくんにいじめられるかも。」と思ったからです。けれども、人がつらい思いをしているのを見て、放ってはおけないと僕は思いました。だから、何としてもそのからかいをやめさせようと思いました。からかいは、ほぼ

毎日でした。僕は、毎日のからかいが、いじめのようにみえてきました。僕は勇気を出して、Ａくんにやめるように言いました。けれども、なかなかやめようとしません。このままでは、その下級生は僕と同じようにつらい思いをずっとしなければならない、と思った僕は先生に相談することにしました。先生は、僕の話をしっかり聞いてくださり、Ａくんと話をしてみると言われました。からかいは、先生に話した日からなくなりました。僕は、勇気を出して話してよかったと強く思いました。

「自分がされていやなことを、人にやらない。」

　この言葉は、小学校の時、先生からよく聞いていた言葉です。本当にそうだと思います。とてもシンプルですが、この意味を意識して生活できるかどうかだと思います。

　いじめを受けていた時、僕は毎日死にたいと思っていました。それほど毎日がつらかったです。

　「足を踏んでいる人は、踏まれた人の痛さはわからない。」とよく言います。いじめや嫌がらせも、している人は、相手の心がどれだけ傷ついているのか想像できていないのです。

　僕の場合、今、生きてこられているのは、僕を支えてくれた家族や友達、先生たちがいたからです。そして、いじめを受けた経験は、僕を強くしてくれ、同じようにつらい思いをしている人を何とかしなければと、行動する勇気をくれました。

　いじめを受けた経験を、僕は前向きにとらえて、いじめのない社会の実現のために、できることに取り組んでいこうと思います。

　いじめのつらさを体験した一人として。